

哲學研究

第百五十七號

第十四卷
第四冊

文學の體系

園 賴 三

九

フイツシャーが文學的想像を三つに別つて、その一は感覺的想像に適應する抒情詩的想像、その二は、造形的想像に適應する叙事詩的想像、その三は、文學的想像そのものに歸着する戯曲的想像としたが、これでは、藝術的想像の特徴を發揮せしめることが能きない。形成機能の上で、モチーフと關聯して、文學的想像が如何なる活動を營むかを檢するとき、吾々は上述の如く、流動的想像、具體的想像及び建設的想像の三つの主要類別を見分けることが能きる。さうしてこの三種の想像力は、各自別個の機能を營み相異なる成果を舉げつゝも、それらの間には連絡あり、自ら階梯を成し、相寄りて一つの體系が形づくられるのである。

文學的想像の契機は言語である。作者は言語を驅使して、讀者の想像裡に對象を浮び出し、又は情趣を呼さますやうに仕向ける。讀者は、述べられた言語を、刺戟として受取りこれに基き、言語をしてさまざまの姿や状態や情趣をば、描きいだし、繰りひろげ、展開させる。

若しも、吾々のこゝろに描きいだす力が、言語に無いならば、「言語の藝術」は存在しないであらう。言語の呼起す表象は、言語藝術を成立せしめる主要々素である。一語々々はそれぞれ或る表象を呼出するものであつて、成語となり、句となり、文章となつて、それらの表象は複雑に結び付き、結合の複合體を示すことになる。この言語表象の結び付きかたの上に、想像力の働く餘地があるのであつて、一篇の詩や小説を成す言語表象は、そのフレキシブルな結合によつて、或は心情状態を傳へ、對象を寫し出し、又は人物、事件を描寫するのである。

このやうに文學に取つて肝要な言語表象は、それでは、如何なる性質のものであるか。この吟味を簡單にかたづけけるために、言語表象の描寫力を繪畫彫刻の描寫力と比較してみやう。さうすれば、人は直ちに、後者が遙に力強いと答へるであらう。後者の描寫力が力強いと感ぜられるのは、それが直接的であり、感覺的であり、具象的で

あるに因る。

色形塊等マツスに賦興されてゐるのは、直接的、感覺的、具象的な造形力であるが、言語の表象には、かゝるヅキヅキツドな造形力はない。文學の言語として、例へば詩の一句が吾々の前に述べられたとする。その句の言語の表象は、吾々のこゝろに最初は幽かに漂ふ如くに現はれ、漸次に密度と明晰度を加へて、内容を具現するのである。

言語表象はその言語が發せられた瞬間に於て、既成物として、心的内容の具現を、吾々に知覺せしめるものではない。言語の表象は、直接的ではなく、言語の感覺的知覺並に悟性的把握の後に、發生するものである。この見地より見て、Theodor A. Meyer が言語表象を考究して、それが *Nachvorstellung* (複寫表象) であることを明にした (Meyer; *Silgensch der Poetic II*) のは、此方面の研究に對する大なる貢獻であらねばならない。

文學は流れる生の形成であると云つたが、その形成なるものは、型を以つて生を捉へ、感覺形像ジンネンビルダをつくり出し、若くは又、概念的理解を與へるのではなくして、澎湃として波打つ生そのものゝ總量を闡明することである。

言語表象が複寫表象であることは、言語が表象する内容の範圍は、限定的のものではなくして、言語表象の包容力は増大しゆき、流れる生の無限に豊富で多様なるもの

に向ひ、その全體を、吾々に暗示する傾向を示すのである。特にこの傾向は、文學の言語表象に顯著である。マイヤーも言つてゐる如く、文學の言語は生を描寫することを要求されてゐるが、言語による生の描寫といふことは、言語の呼起す表象の活動を外にして爲しえられるものではない。而して、それは複寫表象の方法によつて爲し遂げられるのだ。

言語の複寫表象によつて生を描寫するといつてもそれは、鏡に物の姿をうつし出す如き状態ではなく、生は流動しつゝあり、これを言語の複寫表象によつて、その澎湃として波打つ總量をば闡明するのであり、言換へて、流れる生を言語の複寫表象によつて形成するのである。

而してこのやうに、言語の複寫表象が、生動する生の總量を闡明し、形成するといふが如き仕事をなしえられるのは、一つには複寫表象が單純にして直接的なる表象でないからであり、二には、複寫表象が個々の對象を感覺的に明瞭に具現することに不向きであり、三には、マイヤーが擧げてゐるやうに、言語の複寫表象は吾人を拘束する現實的規定を乗り越えて、同時に、現實の繼起關係や並存關係に、自在に出入することが能き、押しつめた短かさで、現實の特異な簡約 (Abstraktion) を表示する (op. cit. s.42) か

らである。

第二の點は、文學の言語の力を輕視せしめるかもしれないが、第三の點は、その弱點を補つて餘りあるのみならず、生動する生の總量の闡明形成といふが如き、文學に特有の高貴なる仕事をなさせるに與つて大に力あるのである。

尙かゝる仕事を複寫表象がなしうる最大の原因は、言語の複寫表象に際しては特に想像が働く點にある。言語の複寫表象の過程には想像力の顯著なる機能がある。

十

流れる生を言語の複寫表象によつて形成するに當つて、複寫表象が如何なる形で現はれるか、それが如何なる組み合せを示すかと言ふことは、注目すべき肝要な事柄でなければならぬ。

言語の呼起す表象と、その複雑にして、統一ある組み合せ方 (Komplexibilität) の中に Theodor Ziehen が言ふやうに、そこに言語の美的主要機能が存在する。(Ziehen; Vorlesungen über Aesthetik Teil II s. 25)

元來、言葉が發せられて、れその意味を掬み取ることができないなれば、言語は用をなさない。普通、言語はそれが意味する事柄を表象する性質を有するものである。

言語の表象は、それ自身のみにて存在するならば、フォルケルトが言ふやうに、不充分であり、事柄^{ザツ、ハ、ペドイッテ}の意味を傳へることによつて始めて言語の言語たる所以を示すものであつて、言語の表象は *Bedeutungsvorstellung* (意味表象) として獨特の領域を有し、他の種類の意味表象が姉妹藝術に於て有するよりも、文學に於て言語の意味表象の占有する位置は、特殊の重要性を帯びてゐる。(Volkelt; System der Aesthetik I. Bd. II. Ab. 4 u. 5. Kap.)

言語が本來有する表象作用たる、これら意味表象、複寫表象の作用を、一層發展させることは言語藝術たる文學の本領であるが、その仕事に向つて想像力が關與する。

言語の意味表象は仔細に見れば、その單語の置かれる前後の繋がり具合や、言語を受取る讀者の、知識の相違、教養の程度、精神興味の向き、表象活動の難易さうした個性の事情に應じて差異を免れないものであつて、それらの上に立つ綜合過程である。

日常吾々が實際生活の上に使用する言語は、その意味表象が簡單明瞭にして、對話者間に於て、直ちに、何らの骨折なしに、了解されるものでなければならぬ。前述の如き、言語の個別的な意味表象は避けられなければならぬ。言語の意味表象は、日常的使用に於ては、たゞ單に、事柄を人に傳達し、その意味するところを了解させれば

足りるのであつて、この場合、意味表象は單純なる状態に留まるのである。

然るに、それが文學となつた場合には、かゝる状態に留まつてゐてはならないのだ。文學に於て、言語の意味表象は充進し、濃厚となり、目立つたものとなつてゐなければならぬ。而して、言語の意味表象をば、このやうに發展させるのは、phantasieanschauung

(想像直觀)である。とフォルケルトは見てゐる。(op. cit. s. 116.)

文學に於て、言語の複寫表象は、想像力によつて動かされ前送せる如き個別的な意味表象の形を押しすゝめる。それで、此の方面に於て、メタフォアやアレゴリーや象徴や、或は又、擬人化などの如きものも現はれる。

複寫表象の性質として、その包容力は頗る大で、その中に生の限りなき多様性が含まれてゐる。さうして、それらは皆、それ／＼意味を表象せるものであるから、多様のうち、自から、意味間の連絡がつき、想像によつて意味の合成體がつくり出され、メタフォア、アレゴリー等の如き^{グスタルト}形象を産出するか、少くとも、内面的な直觀性^{アンシヤウリヒカイト}を湛ふる構成物となつて現はれる。このことは、文學の一般に互つて現はれる。それは抒情詩に限られたこと柄でも、又、小説だけに著しい事柄でもない。

既に述べた通り、文學は流れる生を言語の複寫表象によつて形成する在事である

が、言語の複寫表象による生の形成を如何なる状態で爲し遂げるか、このことは、吾々の前に上述のものとは又別個の見地を展開する。

而してこの場合、想像力は言語の複寫表象を如何に導くか、そして如何に複寫表象を組み合はせるかと言ふことが、吾々の注視點となる。

その一に、想像力が言語の複寫表象を導いて、暗示的に働かせる方法がある。それは複寫表象をして對象を直指せしめ、觀照者の心を固着させるやうに仕向けるのは正反對に、心をば放つて自由にかけてめぐらせるのである。言語の複寫表象に備はれる現實の規定を乗越えて、縱横自在に現實の内容に出入し、それを簡約的に表示する性質は、想像によつて一層高められ、流れる生の形成を、隱約のうちに、象徴的に爲し遂げる。

上述の如き言語の異常な表象力に乘せられて、魂は、一瞬時にして全宇宙をめぐる來るの思ひがある。さうしてかゝる方法にて言語が複寫表象するとき、言語表象の描き出す情景や對象の世界の如きものは、最早や吾々の關心ではなくなり、たゞ、澎湃する生を通して心の流動感のみが切實なるものとして殘る。これ抒情詩である。

流動的想像が言語の複寫表象を導いた結果に外ならない。此の場合、想像は表象

を確實に組み合せたり、又その組み合せの上に工夫をこらす必要はない。

言語の複寫表象によつて構成せられる形象グスタルトは、結局非感覺的であるにせよ、言語表象作用に固有の、吾々のこゝろに描きいだす力そのものに信賴し、これを實地に行使する場合がある。さうして、この場合は、表象の組み合せの上に殊更ら工夫をこらすのである。

想像力は、この組み合せの工夫に貢獻する。即ち、表象を確實に組み合せ、積み上げ築き上げるやうに組み合はさせる。さうしてその結果、表象の形成が爲し遂げられ、情景や人物の描寫がなされたと言ふ状態に達する。複寫表象の特性なる現實内容の簡約的表示は、この場合にも現はれて對象の情景や人物の姿を、時間關係の上に、又空間關係の上に、同時に縦横自在に捉へると共に、想像力の助けによつて複合的表象は、情景を髣髴させ、こゝに對象の描寫なるものが爲されることになる。かくして描寫文學が現はれる。これ造形的想像が言語の複寫表象を導いた結果と見られる。

描寫的文學形象は、複寫表象によつて構成されてゐる限り、感覺的ではありえないが、併し、想像直觀によつて、表象機能は高められてをり、且つそれが對象より對象へと、對象の面を掠めて通り過ぎつゝ、生動する生の總量を感じさせることによつて、生の

形成を、具象的になし遂げることが能きる。

言語の複寫表象の組み合せが、この程度より一層集中的となり、對象の描寫に、内面的統一の基礎が與へられ、かくして、文學形象が性格を反映するものとなり、行動を生産する状態に迄進む。この場合にも、文學形象は、矢張り感覺的ではないけれども、想像直觀によつて言語表象は強められ、前の具象的である階梯より一段進み彈力づけられたものとなる。

さうして、生の形成は躍動的となる。これ戲曲的なる生の形成である。言語の複寫表象を建設的想像が導いた結果と見られる。この場合、複寫表象は、最早や、對象の面を掠めて時間空間の關係を自由に飛びめぐることがせず、必然性を以つて事件を現前に展開させ、生動する生の總量を直觀せしめる。(未完)